

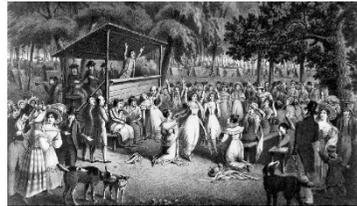
## 米国メソジストによる大覚醒運動 ——マーサーズバーグ神学批判の視点から

藤本 満

### I 米国メソジスト、19世紀の展開

1806年、8ヶ月をかけてバーモント州からジョージア州、マサチューセッツ州からケンタッキー州と15の州、8000キロの巡回の旅路を終えたフランシス・アズベリーは、英国に帰った同僚トーマス・コークに報告を書いている。この時点でアズベリーの指導下に数百人の説教者、そして前年だけでも8273名の新しい会員をメソジスト教会は得ることができた。また彼は、メソジストのキャンプミーティングが華々しく成長していること、ニューヨークの北東部では4日連続の集會に3千人の会衆と百人の説教者が集まり、神の恵みが圧倒的に注がれたこと、悔い改めてすすり泣く声が至るところで聞こえ、集會が終わらないために眠ることができなかったこと、などを。アズベリーはキャンプミーティングという新しい伝道の手法を大々的に取り入れ、5年間でアメリカの人口の1/3、約34百万人の国民を取り込むことができた<sup>1</sup>。数字的には少々誇張はあるかもしれないが、この手法が漸しく開拓されていく諸州に大きな伝道の影響力を持っていたことがわかる<sup>2</sup>。

しかし、トーマス・コークと英国メソジストは、アズベリーがキャンプミーティングをこれ



ほどまでに用いて米国メソジスト監督教会を発展させている様子に懸念を示し、英国の *Methodist Magazine* に（ウェスレーによる *Arminian Magazine* の後継）は、キャンプミーティングに関する記述をすべて削除した。アズベリーが次々に按手を施している現実、また認可なしに用いられている説教者に対して英国メソジストは警告を発していた。それが日常的な礼拝の形式とあまりにも形態を異にすること、またキャンプミーティングを描いた図版はいくつもあるが、どれも説教者の大きなジェスチャー、聴衆の悲しみや歓喜を表現していることでわかるように、キャンプミーティングは大きく揺れ動く感情はつきものであった。しかしアズベリーは、ウェスレーの、たとえ野外であっても聖餐と整えられた説教を中心とした集會ではなく、連日連夜なされるこの手法こそが「大きな網で魚を捕ることができる」<sup>3</sup>として、米国開拓地伝道に最も適していると判断した。

アズベリーは、大胆にも米国メソジストの発展が初代教会と二つの点で似通っていると考えていた。第一に、米国メソジストの説教者たちは、初代教会が福音を漁師や取税人に説くことができたように、無学な人々に福音を説き、体験させることができた<sup>4</sup>。第二に米国メソジスト監督教会は、使徒の教会のような監督制を回復させた。監督は、断固たる決意をもって散らされた羊をくまなく訪れ、ケアし、そして巡回する説教者たちの苦悩を自ら体験していた<sup>5</sup>。そして監督アズベリーだけでなく、彼が組織していった巡回システムに組み込まれた伝道者たちは、確かに伝統的な意味での教会人であったわけではなく、まるで使命を受けた軍人のようにいのちをかけて、伝道という任務を果たしていった。彼らは、学のない社会的な経験の乏しい人々をも招き、人々が理解できる言葉で福音を単純に説いた。いわゆる礼典、教会音楽、聖書の講解ではなく、人々が理解でき、味わえるタイプの音楽や説教スタイルが生み



<sup>3</sup> *Ibid.*, 3:251. 事実、独立戦争期（1776年）には、メソジストがアメリカのキリスト教人口に占める割合が2.5%にすぎなかったのに対して、1850年には最も大きな教派（35%）に成長した。

<sup>4</sup> *Ibid.*, 3:479-81.

<sup>5</sup> *Ibid.*, 3:486.

<sup>1</sup> Asbury, *The Journal and Letters of Francis Asbury*, ed. Elmer C. Clark, J. Manning Potts, and Jacob S. Payton, 3 vols. (Nashville, 1958), 3:341-45.

<sup>2</sup> *Ibid.*, 3:343.

出されていった。

キャンプミーティングという「場」そのものだけではなく、そこで回心のために用いられた即興的な説教（説得）、民衆になじむ旋律の賛美歌、女性の祈祷会、また特にチャールズ・フィニー（長老派）が1830年代から広く用いる「悔い改めの椅子」（anxious bench）などは、この時代に生まれた「新しい手法」（New Measures）と呼ばれていくが、リバイバルのフィニー（長老派）が登場する以前に、すでにメソジストでは、一般的に用いられていた<sup>6</sup>。

いや、そのような歴史的な順序立ても誤解を招く。19世紀のリバイバル運動は教派を越えて複層的に展開し、やがて第二次大覚醒としてアメリカを包んでいった。1801年、開拓地ケンタッキーのケイン・リッジの長老派教会の集会で、集会は1週間続き、1万人が出席した。集まった長老派の牧師たちは、会衆が教派を超えている現実を目の当たりにして、自分たちを聖書の教えとキリストに従う者たちと宣言し、スプリングフィールド長老教会、カンバーランド長老教会として、独立した教派教団がうまれていった<sup>7</sup>。同じように影響はドイツ改革派に及び、後述するように新しく分離した教派教団を生み出した。

さて、ここで注目したのは、このような大小様々な信仰復興運動の中で起こっていく「大衆化」と呼ばれる現象である。エドワーズやウェスレーの説教を読むと、神学的で理性的である。彼らが罪や悔い改め、信仰、キリストの贖いを説くとき、それは宗教改革の神学であった。ところが運動が大衆に広がりを見せると、説教によって語られることは「ポピュラー化」（大衆化）されていく。

この大衆化の方向性を、米国教会史家ネイサン・ハッチを「民主化」（democratization）と呼ぶ。この米国キリスト教会を特色づける方向性について、ハッチの説明に少し言及しておく。米国

メソジストにとどまらない、大覚醒に共通して言える大衆化・民主化という動きは、「反知性的なものと言うよりは、これまで伝統的に大学の神学部で教育を受けた牧師がキリスト教の全体を独占するという傾向を打破する意図をもっていた」<sup>8</sup>。それは一般大衆の感覚が無責任な利己的なものではなく、真理を追究する力をもっているとの、信頼の現れであった。神学は学者の間で承認され、過去の伝統から引き出されたから受け止められるというのではなく、もしそれが民衆レベルで理解され、受け止められなければ、必ずしも真理として重んずることはできない。それほどまでに真理を理解する大衆の力を信頼する傾向が生まれてきた。

ネイサン・ハッチは、民主化を導いた典型的な人物として長老派に育ちながらも、教派否定、原始キリスト教への回帰、聖書主義を打ち出し、米国ディサイプル派を創設したアレグザンダー・キャンベル（1788-1866）を取り上げている。キャンベルは、ディサイプル派の神学校ベサニー・カレッジを創設したとき、なんとヴァージニア州から、この神学校には教授職を置かないとの憲章を獲得している。キャンベルはこの神学校を聖書のみによって、しかもその聖書を教派神学の視点から解釈せず、聖書が誰にでも理解できる明白な真理を解説しているとの前提で、聖書主義をモットーとした。キャンベルは当時の大覚醒の潮流にあった多くの者が感じたように、キリスト教会は教派神学や伝統へのこだわりを捨てるときに、教会の平和と調和、そして活力を取り戻すことができると主張していた。

ところが、この民主化された聖書主義は必ずしも平和と調和をもたらすことができなかったことも事実である。ハッチは、以下のように説明する。「残念ながら、彼らが伝統的な制度と秩序を攻撃してそれぞれの自立を獲得できると自信にあふれればあふれるほど、棒を持っている彼らの世界は混乱を極めた」<sup>9</sup>と。

さて、本稿で検討したいのは、メソジストを含めて、大覚醒の恩恵を受けた多くの教会が教派色を嫌がり、実践的敬虔と聖書主義の道を行こうとしたときに、それに確固たる姿勢で抵抗して起こったマーサーズバーグ神学（ペンシルベニアのドイツ改革派）が、メソジストをどのように批判し、またメソジストはそれいどのように答えたか、である。そして米国キリスト教が漸取った歴史の方向性に多かれ少なかれ影響を受けてきた日本のキリスト教が、この時代の

<sup>8</sup> Nathan O. Hatch, *The Democratization of American Christianity* (Yale University Press, 1989), 162.

<sup>9</sup> *Ibid.*, 163.

<sup>6</sup> Richard Carwardine, “The Second Great Awakening in the Urban Centers: An Examination of Methodism and the ‘New Measures,’” *Journal of American History* (1972), 327-40.

<sup>7</sup> 東部の長老派にリバイバルの働きが及んだとき、エドワーズの孫であってイェール大学学長であったティモシー・ドワイト（1752-1817）やレイマン・ビーチャー（1775-1863）らによって、教派を超え、しかも教会の外に、米国キリスト教に重要な組織が設立された。「米国聖書協会」（1816年）、「米国日曜学校連合」（1824年）、「米国国内伝道会」（1826年）、「米国矯風会」（1826年）等々。これらの組織に先立って、米国初の海外宣教団「アメリカン・ボード」が1810年に設立された。

やりとりからどのような洞察を得ることができるのか、考えてみる。

## II マーサーズバーグ神学

19世紀の米国リバイバル運動、特にキャンプミーティングを中心とした悔い改めと信仰の手法に対する批判は、ペンシルベニア・マーサーズバーグに1837年に設立されたドイツ改革派神学校（そもそもはハイデルベルク信仰基準）から放たれた。当時、神学生は数名、教授は2名という小さな神学校であったが、米国プロテスタンティズムの歴史的正当性を担うほどの力があり、ここから発せられた考え方は、「マーサーズバーグ神学」と呼ばれるようになる。1840-50年代にかけて、この神学の担い手となったのは、ジョン・ネヴィン（1803-1886）とフィリップ・シャフ（1819-1893）であった。この二人の説教論考、書物は、ドイツ改革派教会だけでなく、広く米国に浸透していくことになる。

ネヴィンはペンシルベニアのスコットランド系の家に生まれ、プリンストン神学校を卒業後、長老派の教会で牧会し、やがてドイツ改革派神学校の教授に迎えられ1840年に教授職に迎えられた。彼の主な著作は、*The Anxious Bench*（1843）、*The Mystical Presence*（1846）、*The Church*（1847）、*The Apostles' Creed*（1849）であり、第二次大覚醒で用いられた集会後の悔い改めの特別席（anxious bench）に見るようなリバイバル手法を批判し、アメリカのプロテスタンティズムに宗教改革以来の「教会論」を回復させ、教会史を意識した正統信仰の回復を目指していた。

フィリップ・シャフは、スイスに生まれ、チュービンゲン大学、ハレ大学、ベルリン大学で学び、大学教師の資格を得て、ベルリン大学で講義をしていた。アメリカのドイツ改革派教会から来た二人の牧師の目にとまり、その後、マーサーズバーグの神学校に正式に招聘されることとなった。シャフは、アメリカの教会に宗教改革の知的・学的深みをドイツから紹介する意気込みをもって米国移住を決意した。彼もまたネヴィンと同じく第二次大覚醒の反知性主義的傾向、教会史における歴史性・連続性の欠如、果てしなく広がる教派教団・セクト主義に驚き、いくつもの執筆を手がけることになる。*The Principle of Protestantism*（1845）、*What is Christian History?*（1846）、*History of the Apostolic Church*（1853）、*America: A Sketch of the Political, Social and Religious Character to the United States of North*

*America*（1855）、等々。中でも有名なのは、彼がマーサーズバーグを離れて、ニューヨークのユニオン神学校教授時代に執筆した8巻からなる *History of the Christian Church*（1858-1890）、並びに3巻からなる *The Creeds of Christendom*（1877）であろう。

この二人が投げかけた大覚醒、特にその独特な考え方と悔い改めの手法に対する批判は、上述の書物の題名からも推察できるが、以下のようにまとめることができる。

第一に、ネヴィンもシャフも19世紀アメリカキリスト教の「キリスト論的欠陥」を指摘する。おしなべて、アメリカのキリスト教はイエスの道徳的教えに強調点を置き、刑罰代償説に基づく贖罪論に傾いている、と二人は分析した。ネヴィンのキリスト論は、受肉に中心があり、これこそがイエスにおける神の働きを紐解く鍵であり、全宇宙的な視野をもってキリストの働きを解釈できるという。受肉の重要性を説くにあたって、ネヴィンはパウロによる第一のアダムと第二のアダム（Iコリント15章）の概念を持ちだし、次のように説明する。第一のアダムのもとに全人類は墮落した性質に生まれ、神に背を向けている。この問題に対する解決が、第二のアダムである受肉のキリストである。第二のアダムは人類の罪の重荷を自ら引き受け、その教え、働き、死、復活、昇天、栄光を経験された。キリスト教とは、キリストを信じる者が第二のアダムである生と死、十字架と復活、そして栄光に神秘的に参与することである。信仰者の信仰と共に聖霊は働いて、キリスト者と第二のアダムとの神秘的な合一を生み出すという<sup>10</sup>。

第二にマーサーズバーグ神学は、アメリカのプロテスタンティズム全体を包み込んでいた「非教会性」を批判した。そもそも18世紀の信仰復興運動（第一次大覚醒）以来、個人の救いが強調されすぎたため、ドイツ改革派教会を含めて、そもそも改革派的教会論は「ピューリタンの、メソジスト的な教会観」<sup>11</sup>に道を譲ってしまったという。教会とは救われた者たちの会衆ではなく、むしろ教会は聖なる母であって、キリストの新しいいのちを教会はその子どもたちに分け与える、神が定められたキリストの身体である。教会は説教と礼典を通して、キリストのいのちを会衆に与える。シャフは、その大著、『教会史』や『キリスト教会の信条』からわかるように、ことさら教会の歴史的・有機的連続性を強調した。神は教会史のそれぞれの時代に働いておられ、教会を導いて

<sup>10</sup> John Williamson Nevin, *The Mystical Presence and Other Writings on the Eucharist* (Philadelphia: Lippincott, 1846), 214-15.

<sup>11</sup> Emanuel V. Gerhart, "The German Reformed Church", *Bibliotheca Sacra and Biblical Repository* XX (January, 1863), 33.

こられた。もちろん、そこに人間的な墮落や逸脱があったとしても、少なくともプロテスタントは、初代教会から宗教改革に至るまで教会は存在していなかったかのように語るべきではないという。

となれば、オッターバインやワインブレナーのように、改革派に育ちながら、独自の分派を作った者たちは厳しい非難の対象となった。また「悔い改めの椅子」などという新しい手法は、教会の歴史のなかで培われてきたカテキズム、牧会、牧会訪問、教育、訓練、礼典と比べたら、キリスト教信仰の中ではるかに劣るもの、浅薄なものと批判されても当然であろう。

第三に、上述のポイントの中でことさら際立ってくるのは、教会の礼典の問題である。大覚醒やキャンプミーティングにおいては、靈的に直接的な体験が重んじられるあまり、洗礼も聖餐も単なる中身の無いしるしや儀式と見なされてきた傾向をマーサーズバーグ神学は鋭く突いてきた。本来、礼典は、信仰をもってそれを受け取る者に実質的な恵みを届けることができる、「真実な靈的なエネルギー」である<sup>12</sup>。ネヴィンの書物の題名から推測できるように、キリスト教の本質がキリストと信仰者との生ける「神秘的な合一」(mystical union) であるとしたら、聖餐はまぎれもなく合一を強め生かす、神が定められた教会の中心たるべき恵みである。

### III マーサーズバーグ神学によるメソジスト批判

もちろんのことながら、ネヴィンもシャフも単に改革派の中の分派を攻撃したのではない。その矛先は、彼らに直接の影響を与えたとするメソジストに向けられていた。ドイツで神学と教会史を学んだシャフにとって、メソジストの創設者ウェスレーに対する知識は十分なものではなかったことは確かである。彼は早急にウェスレーを宗教改革者たちにはるかに劣る神学しか持ち合わせていない、説教者に過ぎないと断じる。運動体の組織を形成するにあたっては天才的であり、すぐれたビジネス感性の持ち主であったとしても、ドイツ敬虔主義と比べたら、靈的な深遠さ、キリスト教の深みに届かない、大衆説教者であったと断じている。そして賛美歌を見る限り、弟のチャールズの方が靈的にも神学的にもはるかにすぐれていたというのがシャフの見解である。

<sup>12</sup> Nevin, *The Mystical Presence*, 108.

マーサーズバーグ神学の反論は、ウェスレーに対するものというよりは、アメリカのアズベリーに向けられていた。「18世紀終盤から19世紀初頭にかけて、メソジストがルター派、ならびにドイツ改革派に与えた影響は多大である。その結果、メソジスト監督教会の模範に倣おうとして、教理においても教会政治形態においても礼拝においても新しいいくつもセクトが誕生していった。その代表として、ドイツから移住した敬虔な改革派牧師ウィリアム・オッターバインが1800年に設立した the United Brethren in Christ、さらにペンシルベニアのルター派信徒ヤーコプ・アルブレヒトが設立した通称アルブレヒト兄弟団、すなわち Evangelical Communion (Evangelische Gemeinschaft) がある」<sup>13</sup>。

シャフは、セクトを生み出す時に働く精神を痛烈に批判し、その警戒心は強烈であった。その精神とは本稿の最初に述べたアズベリーに通じるところは確かである。シャフによれば、セクトを生み出す者は、突然、自分の教会堂を建てる。その教会においては、あたかも使徒の時代以来はじめて純粋な会衆が形成されたかのように説かれ、自分の名前で自分に従う者に洗礼をさすけ……あたかも1800年間、宗教改革者たちの目にも隠されていた聖書の真理がとうとうこの怪しげな新大陸の一角で、神は彼らに光を与え、聖書を理解することをよしとされた、かのような調子で、なんの遠慮もなくもっぱら聖書のみを引用する。……このようにして立てられたのは教会ではなく、チャペルであり、その建堂にあたり最も自由に貢献したのはサタンである」<sup>14</sup>。ネヴィンもまた1848年に『反キリスト、すなわちセクトと分派の精神』、また49年には *Mercesburg Review* に二つの論文を出しているが、分派を起す者たちには、決まって歴史上のいかなる信条にも自分たちを結びつけることなく、いきなり「自分たちが聖書から直接生まれ、そしてその聖書はいきなり空から降ってきたかのように」語るという。彼らは教会歴史に対する意識が欠如しているばかりか、それを嫌い、教会歴史という連続性と自らを切り離すという<sup>15</sup>。



<sup>13</sup> Schaff, *America*, 204.

<sup>14</sup> Schaff, *The Principle of Protestantism*, 149-50. 写真は米国の歴史建造物にも指定されている、パルチモアにあるオッターバイン教会（現在は古オッターバイン合同メソジスト教会）

<sup>15</sup> Charles Yrigoyen, Jr. and George H. Bricker, editors, *Catholic and Reformed: Selected*

それにしても、シャフやネヴィンに第二次大覚醒、ならびにそれ以前に中西部の開拓地で果敢な伝道を展開したメソジストに対する批判は手厳しい。シャフによれば「メソジストは初代教会の使徒や伝道者の実例を借用して、学びや神学があたかも『実践的敬虔』の妨げになるかのように説き、さらにメソジスト教会の伝道者たちが、その背中を大学の壁にもたれさせる経験さえもなかった、それでいてはるかに神の国の綱に人々をとらえているということを自慢している」<sup>16</sup>と。

特に手厳しく批判するのは、ドイツ改革派教会に分裂をもたらしたような、すなわちセクトを生み出すような、上述のアズベリーのようなおごった考え方である。セクトを生み出す者は、シャフによれば「メソジストは初代教会の使徒や伝道者の実例を借用して、学びや神学があたかも実践的敬虔の妨げになるかのように説き、さらにメソジスト教会の伝道者たちが、その背中を大学の壁にもたれさせる経験さえもなかった、それでいてはるかに神の国の綱に人々をとらえているということを自慢している」と。

さらに彼らの批判はキャンプミーティングと「悔い改めの椅子」に集中する。「悔い改めの椅子」はアメリカキリスト教の発明であって、過去に類を見ない。集会の後で説教に示され心に痛みを覚える者を招いて、そこに座らせ、それぞれに独特な迫りをもって罪をさらに指摘され、信仰へと導かれ、人々は涙やうめきと共に救いを体験する。シャフによれば、こうした新しい手法によって心理的な操作がなされているだけでなく、人々は神が教会に与えられ、歴史の中で培われた恵みの手段を軽視する方向へと導かれていったという。

#### IV メソジスト側からの反論

メソジスト側からのマーサーズバーグ神学への反論は、米国メソジスト監督教会の神学雑誌 *The Methodist Quarterly Review* に見ることができる。主立った反論の一つは、1837年に創設されたインディアナ・アズベリー大学（現在のデポー大学、DePauw University）教授の B. H. ネイダルによる、かなり長いシャフの *America* についての書評である<sup>17</sup>。

*Theological Writings of John Williamson Nevin* (Pittsburgh: Pickwick Press, 1978), 164-65.

<sup>16</sup> *Ibid.*, 173.

<sup>17</sup> B. H. Nadal, "Schaff on America", *The Methodist Quarterly Review* (January, 1856), 122-144.

幾つかの点で要約してみよう。

第一に、ネイダルは、シャフがメソジストは下級階層の民衆、特に黒人に「不純な動機をもって彼らのメソジストに引き込んでいる」と評していることに対して、以下のように述べている。「教会が貧しい人々や識字力のない人々を救うために、ふさわしい働きを担っていない」という嘆かわしい現状を指摘しつつ、本来彼らに伝道することはキリストの特別な関心事ではなかったのか、と切り返している。メソジストは未だ福音が届いていない地域に積極的に福音を宣べ伝えているだけである。事実、ハーバードやプリンストンの卒業生は富裕層の教会に目を向ける傾向があり、当時のマサチューセッツでさえ何十という教区に牧師が不在であった。メソジストは、それらの地域にも積極的に入って伝道を担いはするが、結果、多くの諸教派の人々がメソジストに改宗したのではなく、「私たちの働きの中で回心した何千もの人々はかつてメソジストであったにしても、今は他の教派の会員であることに注目してほしい」(135)と。

第二に、シャフがメソジストはほとんど学問や神学に関心がなく、実践的な敬虔を中心に行っているとの指摘に、ネイダルは驚きを禁じ得ないという。ウェスレー兄弟やメソジストの歴史を少しでも知っている者なら、そのような言及がまったく該当しないことはすぐにわかるであろう。ウェスレーはメソジスト説教者たちに書物を読み、聖書に学び、*Discipline*の第一版には、説教者たちは少なくとも日に5時間は学ぶようにとある。その伝統にある、トーマス・コーク、フランシス・アズベリー（1781-1796年という早い段階に二人の名の下に、メアリランドのアピンドン、現在のボルチモアに Cokesbury College が創設された）、ジョン・エモリー（彼の名にちなんで1836年に南部ジョージア州のエモリー大学が創設された）、そして1839年にはボストン神学校が設立され、さらにネイサン・バングス（長きにわたって *Quarterly Review* を編集し、1841年にはコネチカット州のウェスレアン大学の学長となる）らが教育に携わってきた。メソジストが、神の働きに就くときに、奉仕の熱心さと同じ質の熱心さをもって、自らの頭脳を最大限に開拓し、知識を得、特に聖なる召しに関わる知識を得ることに忠実であることに努めてきた」(136-137)。

第三に、ネイダルはシャフによるウェスレー以来の「信仰復興運動的敬虔」(experimental Christianity)への批判に答えている。ここは、重要なポイントであるので、彼の答弁を

追いかけてみる。「私たちは確かに、イエスや使徒たちと同様に、悔い改めと新生という信仰復興運動的敬虔に重きを置いている。私たちは人々を悔い改めに導くことに労苦し、それを越えて霊的に新しく生まれ変わること喜びを見いだしている。しかし、そうした敬虔が感情に左右されないように極力配慮している。ましてや、悔い改めの状態や新生の真実さとなる霊的な温度を測ることができるような神秘的な温度計を持っているなどと考えたことはない」(139-41)。

またシャフがメソジストは通常の恵みの手段をゆがめて解釈しているという批判に対して、ネイダルは、メソジストは洗礼をもって人は新たに生まれ、聖餐については現臨説 (real spiritual presence) に立っていると釈明している (141)。メソジストは実質的に新しいと考えられる恵みの手段を説いたことはない。キャンプミーティング、祈祷会、組会などでは、説教、祈り、賛美、牧会的な指導という古来の手法を用いているだけである。それらは教会堂がいまだないところ、あるいは週日の野外説教、家庭集会などで用いられることがほとんどであり、それらを「通常の恵みの手段」(ordinary means of grace) とは考えていない (141-42)。「悔い改めの椅子」でさえ、罪責感に苦悩している罪人を救い主のところへ導くために、共に祈る場所に過ぎない。

またシャフがメソジストがキリスト教教育をおろそかにしていると非難していることに対して、メソジストはそもそも教会学校に熱心であり、ハイデルベルク教理問答のようなものではなくても、*Discipline* を用いて、信徒を訓練し、教育するという伝統に生きてきたことを明らかにしている (142-43)。

第四に、ネイダルは、シャフの批判に答えるだけでなく、マーサーズバーグ神学によるドイツ改革派教会の混乱を指摘している。彼は、ネヴィンとシャフによってもたらされた新しい神学にドイツ改革派教会は上手に適応できていないという現実を以下のように記している。「外から見た印象としては、概して、ネヴィン教授とシャフ教授の新しく輸入された、今ひとつ掴み所のない、ドイツ的神学の雰囲気、ドイツ改革派教師の多くは、自らの学びの浅さの故に煙に巻かれている。多くは権威ある教えに圧倒されて議論することもなく義務的に沈黙を守っているのが見受けられる。新しい神学一気に押し寄せ、それを頑として譲らない姿勢に、彼らは偉大な二人の指導者に静かに沈黙を守っている」<sup>18</sup>。

<sup>18</sup> Nadal, 138.

ネイダルの他に注目すべきは、ドイツ語によるメソジスト誌 (*Der Deutsche Kirchenfreund*) の編集長であったウィリアム・ネイスト (1807~1889) による反論である<sup>19</sup>。シャフによるドイツ語メソジスト集会への批判は、「彼らは信仰による義認を感情による義認に、キリスト教の救いを感情的な体験へとすり替えてしまった。しかるに、真のキリスト教は人間全体、魂のあらゆる機能に等しく調和的に浸透していくことを目的としている」<sup>20</sup>とする。これに対して、ネイストは、それはシャフの大きな誤解であり、ドイツ語メソジストコミュニティをひどく傷つけるものであると弁明している。「シャフが、どれほど偉大な神学教授であったとしても、またそのような神学雑誌の編集者であったとしても、根拠のない誤解にあふれた批判をメソジストに浴びせるのなら、一度、彼はそれほどまでに批判するメソジストの『キリスト者の完全』の教理、その他の教理を私たちが出版している書物やトラクトを徹底して自ら読み、検証し、その上で批判すべきである」。シャフの批判は、自ら検証したデータに基づくものではなく、噂や人の批判の上に乗っているにすぎないと。

筆者は、かつてドイツ改革派教会からメソジストに傾いたオッターバインによるヘブル書講解の説教を読んだことがある。オッターバインは、その敬虔の故に人生の最後に自らの著作をすべて焼き捨てることを命じ、この説教だけが私たちの手元に残っている (残念ながら、今回入手することはできなかった)。それは見事な講解説教で、キリストの十字架はただ一度の歴史的贖罪であることが強調され、私たちは信仰をもって、この贖罪の神の行為に自らをつなぎ止めることが必要であり、しかし同じ信仰をもって私たちの外側においてなされた神の救いを、内側に取り込んでいくことが求められている。すなわち、歴史的キリストのみわざを信じる信仰とは、教理の理解、信条への合意ではなく、信仰をもって確かにキリストの中にとどまり、聖霊の力によって外なる死と復活の現実が内なるものとなることが求められている、と。それは実に冷静で神学的な説教であった。シャフがオッターバインをドイツから渡来した「敬虔な改革派牧師」と理解していたことは事実であるが、この一篇の説教からだけでも、彼が神学的な感動を与えることができる秀逸な指導者であったことがうかがえる。

<sup>19</sup> William aim Nast, "Dr. Schaff on Methodist", *The Methodist Quarterly Review* (July, 1857), 428-436.

<sup>20</sup> Nast, 432.

## 結語——象徴的な教訓

マーサーズバーグ神学とメソジストとの間にやりとりは、前者の厳しい批判以外に、メソジストは前者の出版した書物の書評を出しただけで、それ以上の広がりを見せるわけではなかった。ドイツ改革派教会は、その後、内的な充実をはかるために、ネヴィンやシャフによる教会論、聖餐論等を教派内で消化吸収することに勢力を注いだ。また1861-1865年の南北戦争で教会の流れは変わっていった。しかし、この二者の論争は、「象徴的な教訓」をプロテスタントの歴史に残していると思うので、少し長くなるが考える諸点を列挙することによって、小論の結びとしたい。

1) 現代の私たち、すなわち、宗教改革から始まる500年のプロテスタントキリスト教史を多少なりとも客観視できる私たちにとって、ネヴィンやシャフによるキリスト論の総合的理解、教会と礼典、あるいは神学教育の強調はごく自然なことで、正統的であると言わざるを得ない。また当時の人々は、新大陸に移住したすなわち新しい環境で、国教会とは切り離された民主的な教会を打ち立てようとし、さらに大覚醒という大規模な霊的現象が、教会の存在していない開拓地で、しかも野外や家庭でなされていったときに、あらためて「教会的」な考え方をヨーロッパから注入するようなシャフの働きは、決してマイナスなものではなかった。それはこれからのアメリカキリスト教の発展に大きな意義を持っていた。

2) そして、国教会、特にハイデルベルク信仰基準を中核として新しくドイツ改革派教会がペンシルベニアに立ち上がり、それを正統的な視点から牧師を育成するようにドイツから招聘されたシャフにとって、教会の存在しない開拓地に起こった大覚醒の現象は理解不能であり、それが都会の教会に波及して、ドイツ改革派教会に分裂をきたすような現象を看過できたはずはなかった。

3) 加えて言えば、ネイダルが正統的なメソジスト教会の観点からウェスレーとメソジスト監督教会を弁護した内容が妥当であったとしても、おそらくそれは大覚醒の真実な一端であり、大覚醒によって拡大するキリスト教の「大衆化」はそれほど冷静なものではなかったであろうと推察できる。ネヴィンやシャフが懸念する現象は（たとえば、感情が露わになる回心の出来事、あるいは「悔い改めの椅子」による特殊な霊的雰囲気

等々）、大いに懸念されてしかるべきことであったはずである。

事実、上述したように、アズベリーの「米国メソジスト監督教会こそは、初代教会以来……」というような発言は、英国メソジスト教会にとっては傲慢そのものであった。また、米国のキャンプミーティングが1800年代に英国に波及したとき、ウェスレー直系の英国メソジストは却てそれを禁じ、それによってメソジストが分裂するという危機を招いたことから、マーサーズバーグ神学の落ち着いた正統主義的主張には（彼らのウェスレー批判を除いて）、英国メソジストもまたうなずく部分が多々あったのではないだろうか。本来、聖霊の働きは（たとえば、ウェスレーによれば）、悔い改めに導き、罪の赦し、新生の確証を与えるばかりか、聖なるいのちを吹き込み、心の思いを聖め、さらに、心の中に聖なる願いを作りだし、聖霊体験が敬虔度の修練や愛の実践によって人格的・生活的なホーリネスの形成に至る。そのような組織だった指導をする人物は、大覚醒の中心には存在していなかった。

4) しかしながら、19世紀から時を経てきた私たちは、大覚醒を担った人々がたどり着いた結論に対して、その特有な現象も含めて、理解を示さざるをえないことも多々ある。第一にドイツや英国という国教会の体制が根付いて、国の隅々にまで教会がすでに存在している地域と、当時のアメリカ中西部が未だ開拓地であり、そこに移住し、それに合わせて果敢に伝道していった人々にとって、「教会的」であるということは歓迎されなかった。そもそも西部開拓に出て行ったような人々は制度を嫌った。説教者たちはそのような教会制度の確立以上に、個人を救いに導くことは優先されたはずである。マサチューセッツの神学校で学んだ牧師たちも、ドイツの大学で神学を講じる者とも、英国社会でメソジスト教会の存在を明確にしていった者も、未開の地への伝道という緊迫感の中、ただ福音を携えて進んで行った伝道者たちとは次元を異にしていた。

その異次元の世界を包んだ大覚醒は、教派を越え、教職・信徒の区別を越えた雰囲気にも包まれていたはずである。大覚醒の広がりは、「世界は我が教区」と宣言したウェスレーの宣教精神を受け継いでいった人々が神より得た果てしない可能性であったのであろう。そしてキャンプミーティングや「悔い改めの椅子」などは、弊害は多々あったと容易に推察できるが、この開拓的伝道グループの機動力が生み出した手段として、神が用いられたことも否定できない。

5) そのように開拓された共同体において、神学校でしか通用しない神学用語や

キリスト教理解、さらに宗教改革以来一貫してヨーロッパで培われてきた神学教育のヒエラルキーなるものは通用せず、むしろ神は正式な神学教育のない者を用いられた。彼らの多くは学歴のないことを誇りとしていたわけではない。しかし、神は神学的理解のある者もない者も等しく救いにあずからせ、恵みのうちに育ててくださるという認識があった。これが、アメリカキリスト教の「大衆化」である<sup>21</sup>。

職制の外にある人々が十分に活躍できたからこそ、ホーリネス運動では女性の活躍が許された。フィービー・パーマー（1807-1874）の働きは女性を集めた家庭集会からはじまり、やがてメソジストの牧師やビショップまでもが関心を寄せるほど魅力にあふれていた。彼女が1843年に発行した『ホーリネスへの道』は、キリスト者の完全という複雑で中身の濃い教えを極端なまでに単純化したものではあるが、ホーリネス運動の教科書的存在となった。パーマーはニューヨークに住み、1857年にはカナダ、59年にはイギリスを巡回して、ケズウィック聖会の創設者のひとりとなっている<sup>22</sup>。同様に、大西洋を挟んで米国と英国とカナダのホーリネス運動に貢献したのは、カナダのクエーカー教徒、ハンナ・スミスであった。つまり、第一次大覚醒が大西洋を挟んで英米両方に広がったように、第二次大覚醒も同じ動きを見せ、しかもそこで活躍したのが女性であったことは、数十年後に始まる女性海外宣教師にとって輝く模範となった。



<sup>21</sup> もちろん、そこには神学的な変容も見られた。参照、棚村恵子「聖書は女性のマグナカルタ」ジェニー・F・ウィリング（1834-1916）と19世紀メソジスト女性の活動主義の源『ウェスレーメソジスト研究』2015, 59-63.

<sup>22</sup> パーマーの娘フィービー・ナップは生涯500曲もの賛美歌を作曲した。彼女の友人で、この時代でもっとも活躍した盲目の賛美歌詩人ファニー・クロスビーと共に作った『讚美歌』529番の「ああうれし我が身も」（Blessed Assurance）は、歌詞も旋律もこの時代のアメリカ賛美歌（シャフのいう「実践的敬虔」）の黄金期を象徴していた。

6) さて、民衆化、大衆化の帰結として、アメリカには様々な教派教団（デノミネーション）が乱立することになる。同じ信仰告白に立つ教派でありながらも、その政治形態や使命によって、分岐して新しい教会を設立していく。さらに同じビジョンを共有する仲間が集まって新しい教団グループを形成する。自分が所属し、育てられた教会であっても、もはや使命が異なると判断したときには、その教会を出て、新しい教会・教団を設立することは可能であった。ネヴィンとシャフは、あきらかにこうした事態がドイツ改革派教会とそのコミュニティーに影響が及んでしまったことを嘆き、防護壁を設けようとしている。そして私たちもまた、こうした分裂、分派によって同派系列の教団が複数存在している日本においても、この歴史的現象自体がプロテスタントの弱点のように思う。

しかし宗教改革の神学やプロテスタントの歴史に詳しい英国のアリスター・マクグラスは、そこにはまた「功」、すなわちメリットもあったとして、2点挙げている。第一に、多様化は「激しく流動する社会的文化的変化に対応できる力をプロテスタント教会に与えた。もしその対応力がなければ、しばしば教会は自らを過ぎ去った時代の現実に関じ込めておくだけである」と。つまり、宗教改革が改革し続けるためには、古い殻を常に破り続けてきた。その事実が、教派教団の変遷過程、また教会のスタイルの変化に現れていると。

第二に、教団教派の設立は、多くの場合、直面している神学的な課題や社会のトレンドに、既存の教団教派が無関心である時に生じる事態であったとマクグラスは指摘している。勢いのある教会は、常にその時代に生きる人々の飢え渇きに応えようと真剣に努力してきたことに対して、ヨーロッパの国教会はいわば、独占企業状態にあり、築き上げられてきた遺産の上にあぐらをかかっているという批判も該当しないわけではない、と<sup>23</sup>。

7) アメリカキリスト教が、国教会の枠の存在しない世界に形成された「民主的」教会であったこと、また信条の神学の枠組みではなくシャフの言う「実践的敬虔」を重んじてきた「大衆化」の方向性を採ったことは<sup>24</sup>、アメリカのキリスト教の歴史的必然性であったことは現実として受け止めなければならない。すると、いきなりドイツ

<sup>23</sup> 拙著『歴史——私たちは今どこに立つのか』シリーズ「私たちと宗教改革」第1巻（日本キリスト教団出版局、2017年）、237-38。

<sup>24</sup> 同書、183-184。

から渡米したシャフは、そうした歴史的必然性を受け止めた上で批判を加えたのか、それともこの実情に極端に反発し、ヨーロッパの教会性を理想とし、それを貫こうとしたのだろうか。

どちらにしろ、シャフのアメリカキリスト教への学的貢献は多大であるが、マーサーズバーグ神学のメソジスト批判は、その後、改革派教会がメソジストを批判するときの「典型」して、今に至るまで歪曲されたまま残っていることは残念に思う。

7) 最後に、南北戦争を経て大覚醒の影響が二つにわかれていくことに触れておきたい。メソジスト監督教会は、南北戦争を越えて、神学を重んじ、神学教育を正規に提供する神学校をいくつも建設していく。そして世紀の後半にはドイツへの留学生が増え、それによってドイツから自由主義神学の流入が始まる。大覚醒の特色ある波は、メソジスト監督教会ではなく、そこから分裂する様々なホーリネス教団に移行し、それは自由メソジスト、ナザレンの創設へ、さらに20世紀初頭のムーディー聖書学院に代表される、シャフが批判したような「実践的敬虔」を主体とする聖書学校の設立へと、受け継がれていった。やがて、それが中田重治によるホーリネス運動となって日本に開花したとき、そこにはまたもや、メソジスト「教会」からさらに一歩荒野の開拓に出た大衆伝道の力が合った。しかし、またもやマーサーズバーグ神学の批判が「新たな意味」で妥当する運動的な状況が展開していった。やがて中田重治が独特な再臨観を展開する時には、大衆化して神学の乏しき運動は、分裂によって自らを傷つけるという結末を迎える。

そのように振り返ると、マーサーズバーグ神学の批判は、「実践的敬虔」を尊ぶ流れにあっては、時と共に色あせることがない真理を含んでいる。

(インマヌエル高津教会牧師)